

○「地域社会とのつながり」に係る主な意見

No.	意見内容	発言者	区分	発言部会
1	<p>「地域社会とのつながり」はずっとではないが、最初の年度から下がり続けている。それと資料3の最後のページを見ると、ずっと下がっている。でもそれに近い内容のものに関して、資料6、7ページあたりに近所のつき合いどうですかとなっているのですが、この集計の方法というのは大丈夫かなと、<u>つき合いがあるのにつながりがないというのはどういうことなのだろうかと。</u></p> <p>逆に言うと、そんなに皆さん幸福に関して地域とのつながりはあまり重要ではないのかなと、何かふわっとしているのですけれども、そんな感じがしてならないような気がした。</p> <p>まだコロナの議論に入らなくてもいいかもしれない。資料3の9ページを見たときに、何でこれ差がついたかという、多分、県民意識調査というのはそういうふうに年齢が寄っているがためであり、補足調査のほうが厳しい。年齢の部分を見るとこの9ページの方がより近いのではないかなと思った。</p>	Tee委員	意見	第1回
2	<p>資料3の6ページ目のどのようなおつき合いをされているか、和川委員の言葉を借りれば行動のところだと思ひまして、確かにこれ全体を見るときつき合いがある方の割合としては大きな変化はないが、子細を見ると、質というか、やはり密度が変わってきているという、ピンクのところが少しずつ減ってきていて、<u>挨拶程度の最小限のつき合いというのが少しずつ増えてきている。</u>下の問4ー2のところの<u>近所の方の数というのも同じようにずっと変化してきている</u>ということで、そういうところで<u>徐々に変化というは現れてきているという考え方ができるかな</u>と思った。</p> <p>というわけで、だからどうという話ではないですけれども、あと年代にもよるかなという気はしますので、そこをどこまで分析していけるかなと思う。</p>	山田委員	意見	
3	<p><u>地域コミュニティーが効いていないので、近所づき合いはあまり幸福感に関係ないのではないかと</u>いう話があって、それに対してちょっとだけ反論をさせていただくと、まず<u>研究会では地域コミュニティーというのは重要だということ、ポジティブにさせるものだと、顕在化させるものではなくて、じわっと効いてくるものだというお話があった</u>かなというふうに思っている。例えば自然環境とか治安というのが、重視するものでは下にあるが、9位とか7位にあるのですが、<u>当たり前だと思っているものというの、実は顕在化、表面化しにくい。</u>例えば、ただきれいな水を飲んでいるのは全然幸福感には影響しないけれども、水が濁れば幸福感が下がるとか、治安もそうだが、安全なのは別に上がらないけれども、治安が悪くなると下がるとか、やっぱりそういうのもあるかなと思うので、<u>一概にソーシャルキャピタルは効かないという判断ではなくて、そこをもう少しもしも議論するのであれば突き詰める必要がある</u>かなというふうに感じた。</p>	和川委員	意見	

4 (主観的幸福感 No. 13 再掲)	<p>一番最後の広域振興圏別のデータもあって、ここもさつきちらっと出た沿岸ですね、沿岸のデータが5分野でマイナスで、実は上がっているところは一個もない。通常であれば「心身の健康」はちょっとぐらい上がってもおかしくない。しかもほかの3つの地域は上がっているにもかかわらず、ここでも沿岸は上がっていませんし、主観的幸福感も上がってはいない、パーになっている。一方で、マイナスが5分野もあって、特に「地域社会とのつながり」なんか0.3ポイント下落ということですから、0.3まで下がるという主観的幸福感の動きの3倍ぐらい下がっているということですから、かなり振れ幅が大きいかなと思っています、これどこも下がっているのですけれどもね。やっぱり広域振興圏別にいろいろ政策を打っている、今後打つと思うのですが、その場合横並びの政策をするというよりもどこに重点を置いて地域別の暮らしを支えていくかというのはいずれ次の計画の中では考えていくと、こういったデータがありますよと、なぜ沿岸でこういったことが起こるのかということをそれに合わせた対応はどうしたらいいのかということも考えてもいいのではないかなと思っています。これが客観的データ、これは意識なので、主観的なのですけれども、何か定量的なデータと関連しているのであれば問題もあるし、それから震災から12年ということを考えていくと、いろんな意味で関心の低下や投資の低下等々があって、一方で整ったインフラをどう使っていくのかというような課題も残っているはずで、インフラ不足というわけではないと思うのですけれども、しかしなかなかそれが実感として県民の皆様にいろんな分野で認識されないと、かなり投資していろいろ回復、復旧していますので、これが評価をいただけるような仕組みも作っていった、長続きするような地域になる必要もあるのではないかなということも考えて、年齢や地域についての差が出ているということも分野横断で見たいというふうに思った。</p>	吉野部会長	意見 提言	第1回
5	<p>具体的なデータとしてお話しできる話ではないが、今吉野部会長から沿岸で特に「地域社会とのつながり」のところが低下しているという話があって、私が関わっている復興の方の委員会です。どうかが問題になっているかという、数ある問題の一つであり、要は災害公営住宅に皆さん入居されるようになった結果として、従来のコミュニティがなくなってしまっているという話になっている。どうやってそこを再構築するかというのは非常に大きな課題になっているという状況があり、そういったこともここに影響しているのかなと思って聞いていた。具体的に数字でどうこうと言える話ではないが、いずれ元々あった隣近所のコミュニティというものが災害公営住宅に移ったら、もうそれが全然なくなっていると、隣の人も誰か分からぬというような状況。そこから今やり直しているような状況で、なかなか難しいところがあると言われている。</p>	谷藤委員	意見	第1回
6	<p>復興の過程でできてきた住宅形態がほぼ完成したのが随分後で、大体今から三、四年ぐらい前にほぼほぼ完成して、そこからスタートになっているので、むしろ事態が顕在化しているのはここ数年間、復興が随分経ってから。確かにそういう住宅形態というのは、ほかの地域ではあまりなく、被災した方がいっぱい入っている。そういったのがあるかもしれない。ハードが整備されたとはみなさんおっしゃいますけどね。</p>	吉野部会長	意見	
7	<p>横断的や、時系列という幾つもキーワードが出たことは私も賛成で、冒頭でお話が出たように今回で一つの区切りというか、アクションプランですか、今まではコロナの影響がどういうふうになるか分からないので、まずはちょっと見ていこうと、何年かをとってみなければ分からないよねということで、ひとまず来たと思うのですけれども、ここが一つのもし区切りだとすれば、先ほどTee委員や和川委員もおっしゃったように、平成31年前からの流れの計7年、8年ぐらいのトレンドで見たときにどう見えるのかという、そちらで見て、それらの属性で輪切りにしていくといえますか、先ほど若菜委員さんがおっしゃったようにに若い世代の人にとっての「地域のつながり」ということと、年配の方のつながりというのと意味合いが違ってくるのを大きく分析は難しいなというのを、谷藤委員さんがおっしゃったように理由を推測するのは結構きついなというのが私は感じてきた。</p> <p>ですので、せっかく資料6の形で平成31年調査と令和4年調査の比較ということで、原案については出していただきましたけれども、場合によってはこれまでの蓄積を踏まえての、今回は少し形態が違う形の分析というのを、それをできるようになったのかなという感じで今印象を受けた。</p>	山田委員	意見	

8	<p><u>コロナの影響は間違いなくある</u>のでしょうね。ただ、<u>コロナだけかどうかというところになってくるのかなと思う</u>が、身近なことで言うと私の町内会でもコロナの関係で班長会議を毎月やっていたのをやらなくなったようなのです。全然やっていないわけではないけれども、間隔を延ばしたりしています。<u>地域の行事も今のところコロナを理由に、本当にコロナが理由かはともかくとして、コロナを理由にやっていないという状況あるので、だからコロナの影響というのは推測するのは無理はない</u>ですよね。あとはというか、皆さんどう思うかは別にして、<u>取りあえず私の頭の中ではほかの要因はないのかなと</u>。</p> <p>もう一つ心配するのは、フォアキャスト的な話になりますけれども、<u>コロナが収まったら元に戻るのだろうかという心配、不可逆的な変化になりかねない</u>、これを見ていて。<u>コロナにかかわる考え方としては2つあって、コロナだからしょうがないねと、一つは言えるのだけれども、収まったときに、バネが元に戻るように戻るかといったら多分戻らないのではないかという心配。政策的にはむしろそっちの心配をしなければいけないだろうと思う</u>のです。</p> <p>あと先ほど来沿岸の話が出ていますけれども、沿岸は災害公営住宅等で従来型コミュニティーがなくなってきているところへの対策、ただこれは復興の方で問題意識として持っていますので、そこはお任せでいいのかなと、私はそっちに関わっているから、お任せと言ったのはまずいのかも知れないけれども。</p>	谷藤委員	意見	
9	<p>今谷藤委員おっしゃったのは非常に重要で、そもそも変動要因がコロナが要因なのか、コロナ以前のものなのか、同じ下がり続けていてもその要因が違っているかもしれないし、動きが変わっているかもしれない。さらに、コロナが要因だったとある程度分かったとして、それがコロナがある程度収まっても戻るか戻らないのかというところが非常に重要だと思う。</p> <p><u>福島県の方で、実はコロナを経て総合計画を作った</u>ものです。その中で、とても参考になるのですけれども、やはり<u>戻るものも戻らないもの、より強めていかなければいけないものと政策を大きく分けていて</u>、例えばつながりとかになるとある程度コロナが収まってもその距離感というのはとらざるを得ないだろうと。とすればどういった手を打たなければいけないのかというような観点から総合計画を作って、ここは政策一個一個を見ていかなければいけないのが、例えば従来であればイベントを開催して、多くの人を集めてという指標ができていたわけだが、この指標が多分成り立たなくなってくる可能性ある、リモートでどうするとか、あるいは集まらなくてもいいようにどういうふうなつながりを強める策を打っていくのか、全くその手法が変わってくるといったところもあるので、すみません、感想で恐縮なのですが、ここは<u>これから政策をつくる上でも非常に重要な要素</u>かなというふうに考えている。</p>	小野政策企画部長	意見	第1回
10	<p>今谷藤さんおっしゃったように、コロナ以外の要因もというところで、確かになと思って、資料6ー2の記入欄を見たのですけれども、やっぱりそもそも人間関係が煩わしいという人で、ちょっとこれ調査もあれなのですけれども、<u>地域社会といったときにどうしても自治会とか町内会という支援の方のコミュニティーを連想しがちだが、私たちの活動も地縁は煩わしい、若い人は特に</u>。</p> <p>では、別に地縁のつながりではなくて支援、志の方の支援はサークル活動とかいろんな形で社会とのつながりはあり得るので、そっちももっと充実させていこうという、多分そういう流れになるのだが、そういう意味で<u>地域社会といったときに、どうしても地縁的な社会のほうに寄っているバイアスがかかってしまっているのだなと。そうすると今後はずっと低下傾向に、コロナが収まっても、今後はずっと下がっていくと</u>。</p> <p>でも、「<u>地域社会とのつながり</u>」というのは自治会とか町内会だけではないよねというところの動きと、それをこのアンケートにどう絡めさせていくかというところは今後すごく難しいのだろうなと、先ほどのお話を聞いて思った。</p> <p>だから、<u>コロナの影響もあって下がって、でも構造的に今後も下がっていくと。でも、ほかのつながりがあるよねというところの評価と、それをどう捉えるかというところは注意しなければいけない</u>なと思った。</p>	若菜副部長	意見	

11	<p>前回で若菜委員の意見だと思うのだが、「地域社会のつながり」は町内会のみではないと、いろんな活動があるとおっしゃっていたので、ちょっと関連して思ったのは、結局その中の、そんなに給与がもらえていなくて、余裕もなくて、相当その分幸せで来ると自分のレジャーとか町内会ではない方のそういう活動になるのではないかなと思って、結構関連あるなと思った。</p> <p>資料5—2の「地域社会とのつながり」の部分を見ているが、これを見ると年代別では高齢者の方が高い。年齢層が若い方は低いという傾向がある。それが結構この分は平成28年にデータをとっていて、それ以降見ていくとそれほどその傾向は変わっていないとなると、若い人が年を取るとこうなるかというふうになるのかと感じなくなってくるとどんどん、どんどん必然的に年を取っていくとあまり感じないままですってしまふのかな。ちょっと分からない、これだけ見ると分からないのですけれども、でもやっぱり趨勢的に低下傾向にあるような気がした。有意か有意でないかは別にして、R4で見ると3を切っているなど、どんどん落ちてくるかなという傾向が見られると思った。</p>	Tee委員	意見	第2回
12	<p>印象レベルの話なのですが、資料6のつながりのところの1枚目のところなのですが、どういう項目を挙げているのかというのを見たときに、ポジティブな表現にせよ、ネガティブな表現にせよ、2番と5番が割と多いですよ、1番はちょっと別にしてですね。ところが、自治会、町内会活動とか、隣近所との面識というのが多くて、3と4、要するにイベント系、行事のやつですね。それよりは2と5の方がざっくりいって、ネガティブでもポジティブでも多いですよ。ということは、地域社会とのつながりという分野の評価に関しては、日常的なつながりの部分で評価している傾向が強い。要するに、特別な行事があるとかないかとかというのは、それは回答者を重視していないなという気がして、そう思って見たときに、1ページ目の裏側のコメント見ていると、そもそもこういった日常的な隣近所とのつながりというのを煩わしく感じていたり、面倒くさいと思っている人たちも結構いるのかなという印象を受けています。だから、ここ逆でそれでは駄目なのだというのはおこがましい話で、それはそれとして受け止めて進んでいかなければいけないのかなと思った次第。</p> <p>結局コロナで行事がいろいろ中止になっているというのも現にあるのだけれども、意外とそこについて項目として挙げている人は少ないなという印象。だから、結局コロナが収まってもあまり変わらない傾向が続くのかなという印象を持っている。あくまでも私の印象。</p>	谷藤委員	意見	第2回
13	<p>先週と、あと先ほど委員の皆さんお話しになったこと、共通の印象というか、思っているところあり、若菜委員さんが先週おっしゃった構造的なところではないかという、そこが私も同じような印象を持って、今回資料を見ていた。</p> <p>例えば資料3の7ページ、これはどう見るかなというところもあるのですが、こちらは実際の付き合いの方の、友人・知人あるいは親戚・親類の方あるいは問4—4、地縁的な活動とか、こういういろんなこちら実際どうされていますかというところと、ちょっとあわせて見ていく必要もあるのかなと思った。例えばこちらの問4—4、下の方、こちら1の地縁的な活動というのを見ると一回下がって、またちょっと上っているというところで、ここを見ると全体的には例えばもし地縁的なということでは少々下がり過ぎみいことは言えるのかなと。ただ、これは今谷藤委員さんおっしゃったように、コロナの影響というのはある程度加味する必要があらうかとは思っている。</p> <p>何を申し上げたいかというと、年齢層という話も何度か皆さんおっしゃったところで、例えば場合によっては、これはあくまでも一つのアイデアというぐらいですけれども、先週和川委員さんが横断的に見ていくと、資料というのを見ていった方がいいのではないかとということもおっしゃっていたので、場合によっては、例えば年齢層、例えば地縁的な活動とか、こういったところがどういう年齢層で推移しているかといったところの意識と実態レベルのところといいますか、というのとあわせて分析するとした方が分かりやすいのではないかなと、あるいは分かりやすいのではないかなと考えているところ。</p> <p>その点で言いますと、結局この地縁というところ、ではどんどん減っていったって、それが都市的なところでそうなのか、多分地域条件というのにかなり規定されるところもあるのかなと思いますので、そこら辺をある程度今回どこまで分析するのかといったところはもしここを検討すると去年とはまたちょっと違う分析の仕方というのが必要になるのではないかなと思っています。</p>	山田委員	意見	

14	<p>前回はリクエスト出たと思うのですが、今回提出されているクロス集計だけではなくて、<u>今のよう</u>に問4—3とか4—4のようにですね、<u>5,000人調査の方、これについても例えば年齢別とか、地域別とかが見えてくると、やっぱりこういったことも参考にして実感が上がったたり下がったりということと関連あるのではないですかという御意見だと思うので、次1か月ぐらい空くので、調査統計課さんのほうに、この部分のクロス集計を、今山田先生からお話あった実態、中はどうなっているのかということも分かるので、そういうお願いもできるのか。</u></p>	吉野部会長	資料2-②-2	第2回
15	<p>半分感想になるが、まず今の山田先生の御指摘、私もそうだなと思う。前回もお話したが、<u>調査結果だけを切り刻んで議論したのですが、そういった様々な行動とかを見ながらやっていくと見えるものもあるのかな</u>という感想がある。</p> <p>あとティー先生の方から先ほど資料5—2について、<u>属性別の変動について言及があったが、これを見て正直ほぼ全部が下がっていると考えていいのかなと思う。</u>有意水準が上回っているか上回っていないかの違いだけであって、サンプル数を増やせば全部落ちるのだろうなということで、特定の属性が下がっているというよりは、もう全体的に下がっている傾向なのだろうというふうに考えてもいいのかなというふうに感じました。そういった意味では、<u>構造的に低下傾向だというのはそのとおりなのかなと思う。</u></p> <p>あと最後になります。前回つながりというのは、幸福と関係ないのではないかと話もちらっとあったかなと思うのですが、私もそのときに反論したのですが、ソーシャルキャピタルとここの地域社会とのつながりを同一として私は今まで捉えてきたところなのですが、若菜先生がお話しされましたが、地域とつながりっているいろいろあるよねと。最近サードプレイスという表現が出てきて、家族でもなく、職場でもない第三の場所、それは別に地域ではなくてクラブ活動だとか、そういったところをソーシャルキャピタルとして幸福に影響あるのではないかというような議論も出てきていることを考えると、実はこれ一方でソーシャルキャピタル、もちろんレンジでは重なるところあるのですが、必ずしも一致しないのだなというのを少し感じましたということで、前回ちょっと強く発言をしたのですが、そこを少し補足をしたいなと思う。</p>	和川委員	意見	
16	<p>先ほどの地域のつながりについては全県的な問題だということが分かるのですが、地域の安全についてはやっぱり何人もの方から出ているように、沿岸と県央のところは低く出ているということに着目して、この両広域圏で何か年齢的特徴がないかどうかということを確認することはできるか。今のお話からすると、年配の方たちの心配というのが結構出ているのではないかという実感だったと思う。それで、ここのところ県央と、それから沿岸で年配の人たちがもしぐっと他の広域圏と比べたときに出てくるのなら、これは沿岸とか県央という問題ではなくて、高齢者がたくさん答えたところの問題と見立てることができるのかどうか、見立てることができるのではないかと思います。</p> <p>高齢者の多い地域に対する対策という発想でいくのか、沿岸特有のとか、県央特有の対応という違いが性格的には判別ができるかもしれないと思ったものですから、広域圏別、年齢別、特に高齢者の比較で見ればいいのかと思った。</p>	竹村委員	資料2-②-2	